

研究室紹介

鳥取県園芸試験場 環境研究室

鳥取県園芸試験場は、県中部に位置し、ナシ、ブロッコリー、ネギをはじめとする県内特産園芸作物の振興を図るため、新品種の育成や栽培技術の開発を行っています。

環境研究室は、果樹病害担当1名、果樹虫害担当1名、野菜病害担当3名（うち育休中1名）、野菜虫害担当1名に、室長を加えた研究職員7名と現業職員1名、会計年度任用職員8名で構成されています。また、研究職員は病害虫防除所職員を兼任して園芸作物関係の病害虫診断と予察を行っています。以下に、近年実施している主な研究内容について紹介します。

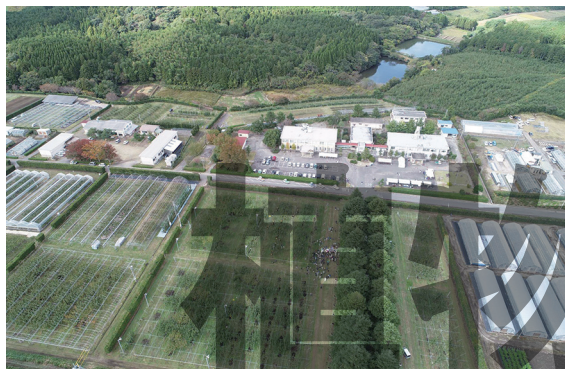


図-1 園芸試験場全景

1 ナシ等果樹の難防除病害虫の防除対策技術の確立

本県のナシの主力品種である‘二十世紀’は長年、ナシ黒斑病に苦しめられてきましたが、耐病性品種の‘ゴールド二十世紀’、‘おさゴールド’への更新が進んだことで、発生量が減少してきました。一方、ここ15年で県オリジナル品種である‘新甘泉’等ナシ黒星病罹病性の品種の栽培が増えたことにより、本病の被害が顕在化し、現在では、本県のナシの最重要病害となりました。これまでに主要品種の葉、果実および芽への感染時期や品種間差、薬剤防除適期および亜リン酸資材の効果等を明らかにしてきました。また、自動草刈機を用いた落葉破碎による菌密度の低下等の耕種的な対策にも取り組んでいます。

虫害では、ナシ園でのハダニ類の樹上および下草の土着天敵について調査を行い、天敵をはじめとする持続可能な防除技術に向けた取り組みを進めています。

カキでは、現地で増加傾向にあるカキ炭疽病対策やマ

イナー害虫であるコメツキムシ対策等に取り組んでいます。

2 ブロッコリー黒すす病の防除対策技術の確立

ブロッコリー黒すす病は下位葉の発病から花蕾の発病へ発展して経済的な損失が大きな病害です。本病は平成25年に本県で確認されて以降、県下全域で問題となっており、防除体系の確立試験に取り組んでいます。また、本病の登録薬剤の系統がSDHI、QoIに偏っており、薬剤耐性菌の発生が懸念されるため、他系統の剤の登録に向けた試験に取り組んでいます。

3 ネギ葉の軟化腐敗症状対策

近年、夏ネギにおいて、出荷調整後の葉に軟化腐敗する症状が発生し、大きな問題となっていることから、鳥取大学と共同で、本症状の原因を究明してきました。その結果、本症状は *Dickeya* 属菌による病害であること、また、分離された菌は40℃で生育ができ、非常に高温でも発症することが明らかになりました。今後は対策試験に向けて取り組んでいきます。



図-2 軟化腐敗症状のネギ

4 ドローンを利用した病害虫防除技術の開発

県内でもドローンによる農薬散布技術が注目されており、ブロッコリー、白ネギ、ラッキョウなどの県産露地野菜でその防除技術の確立に取り組んでいます。現在は、高濃度少量散布による病害虫の防除効果の確認やドローンで散布できる農薬を増やすための適用拡大試験を進めています。

今年度は春先から果樹カメムシ類の発生が多く、注意報や14年ぶりの警報を発信しております。また、生産者に注意喚起のチラシを配布するなど、ナシ・カキ等の収穫期を迎え、最大限の警戒を呼び掛けているところです。日々、喫緊の業務に向かいながら、今後も生産者に役立つ成果が出せるよう取り組みたいと思います。

(次長兼環境研究室長 米村善栄)